

アトリエ 訪問

原色を生かして鮮やかに描かれ、つやりと光るリンゴ。
日本画家・中島千波は四季折々の植物や生き物の姿を見つめ、
独自の世界観をもって表現し続けてきた。
画業50年を超え、今日も精力的に制作を続ける彼のアトリエを訪ねた。

撮影 永野雅子

第 19 回

中島千波

日本画家

都内の閑静な住宅街。そこに白い壁が美しい、3階建ての家がたたずんでいる。中島さんの住居兼アトリエだ。笑顔の中島さんに招かれてその2階へ上がると、明るく開けた空間が現れた。壁には海外のおもちゃやアフリカの仮面が飾られ、床のそこかしこには、絵皿や描きかけの作品が置かれていた。

—— 広くて明るいアトリエですね。

中島 広さは80畳くらいです。昼も夜も関係なく一定の光の下で描きたいので、ブラインドを締め切って蛍光灯の光で明るくしています。展覧会の会場と同じような光のかげんでね。床に絵皿や画材が置いてあるのは、僕がいつも床に座って描くから。絵を立てて描くと、途中で絵の具が垂れてきてしまうからね。

後ろの棚にずらっと並んでいるのは日本画の絵の具。天然の岩絵の具がほとんどだけど、イタリアの土絵の具や中国の墨なども持っています。どの絵の具を使うかは、絵を描く前に大体決まっていますね。

棚や床に置いてあるおもちゃは、メキシコやインドなどで買ってきたもの。道端でおじいさんやおばあさんが売っているようなものを買うことが多いかな。技術的に優れたものよりも、素朴なものにひかれます。お気に入りのおもちゃを、作品の中に登場させることもよくありますよ。—— 代表作「桜シリーズ」の大きな



「パッと見て、おもしろいと思ったらとりあえず買っておく」という海外のおもちゃ。

下絵が立てかけてありますね。

中島 桜はもう30年以上描き続けています。自分でもあきれくらいつつこく描いていますよ。毎年春に、各地にある桜の名木の開花に合わせて全国を回り、スケッチします。樹齢300年以上の大きな桜が多いかな。毎年同じ桜の木を描くわけですが、すごく美しく咲く年もあれば、咲かない年もある。コケが生えてきたり、嵐あって枝が折れてしまったりもする。人間と一緒に、だんだん形が変わってくるのがおもしろい。

いつも「本物の桜以上に見えればいい」と思って描きます。そのためには写真ではなく、実際の桜をさまざまな角度からよく見て、丁寧にデッサンして、自分の中で立体を平面に置き換えていく過程が大切です。数えきれないほどの桜の花びらを描いているときには、「面倒くさい」と思ってしまうこともあります(笑)。それでも手を抜かずに、一つ一つにリアリティをもたせて描いていきます。そうでないと見た人は感動しませんからね。

僕は自然を描くのが好きなんです。最近では火山のシリーズに取り組んでいます。最初は富士山ばかりを描いていましたが、世界中の火山地帯にある、それぞれの山の変化がおもしろいということに気づいてから、これまでにイタリアのシチリア島にあるエトナ山や、ロシアのカムチャツカ火山群、アメリカのマウント・レーニアなどに行きました。日本画で火山を体系的に描いている人はあまりいないかもしれない。一つのテーマをしつこく、しつこく描いていくのが好きです。

—— 高等学校の新版教科書『美術 1』(P.8～9)のために「アップル」という作品を制作していただきました。

しつこく、しつこく描いていく



作品「アップル」のために、枝がついたままのリンゴを色鉛筆で何度もスケッチしてから制作にとりかかった。

この作品を通して高校生に伝えたいことを聞かせてください。

中島 「生きているものをどう絵で表現していくか」ということを見せたいと思いました。そのために自分の生まれ故郷の長野の農園を訪れて、リンゴを持ち帰って、できるだけ新鮮な状態で描きました。それに、リンゴというのはスーパーで売っている、生徒にとって身近なものでしょう。だから、こういうものでも絵になるんだよということも伝えたかった。ピーマンでも、ネギでもいいわけですよ。身近にあるものを、どうやって世界観のある絵にするのか。僕が静物画を描くときにいつも考えていることが、この作品にもあらわれていると思っています。



「夢中になって一気に描き上げてしまう」という桜シリーズの下絵。

なかじま・ちなみ

1945年長野県生まれ。父は日本画家・中島清之。71年東京藝術大学大学院修了。92年には、出身地である長野県上高井郡小布施町に「おぶせミュージアム・中島千波館」が開館。2020年に日本橋三越本店にて、個展「画業50周年記念 中島千波 日本画展-桜花を謳う-」を開催。おもちゃと花をモチーフとした静物画のシリーズや、日本全国の桜の古木をテーマにしたシリーズなどでよく知られる。



完成した新作「アップル」。